

見立絵本の系譜：「百化鳥」の余波

中野, 三敏
九州大学助教授

<https://doi.org/10.15017/12168>

出版情報：語文研究. 34, pp.1-15, 1973-12-20. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

見立絵本の系譜

「百化鳥」の余波

中野 三敏

絵本かと思えば、その絵は日用器材に羽がはえて飛んでいるような変てこな戯画であり読物かと思えば、その文章はやたらに簡略化された絵解きの謎々めいている。まさしく「ぬえ」の如き怪しき作物、その名も「百化鳥」という絵本が板行されたのは宝暦五年の江戸である。以来その跡を追って同想同趣のおどけ絵本が三都に流行する。これ等は従来「見立絵本」と呼ばれて来たものの、絵本としても戯作としても、この全貌にふれた論のある聞かない。その故は内容が絵と文章のどっちつかずである如く見える事と、又あまりにも他愛のない見立故事附に終始している事から、採りあげてあげつらう事の大人気なさを慮られての爲であらう。

しかし近世文学の特徴を約言して「教訓と滑稽」というのが私見であり、その意味からはさしづめこの「見立絵本」等は「滑稽性」の表現において極めて純粹な作品であり、従って近世文学の原点の一つがこゝに集約されて示されていると断言して

よいように思う。実際、宝暦以降の戯作類にあたってみる時、その最も戯作的な作品の趣向の型は、殆んどがこの見立絵本の系列に帰納してゆける事は既に先学の御指摘が備る。今、かゝる見立絵本の魁として忽然とあらわれた「百化鳥」をとりあげ、その出現から以後の様相を探ってみることにする。

絵本ゆえ百聞は一見に如かず、まず一例を図で示し、見立絵本の如何なるものかをとくと御賞覽ありたい。

二

「見立百化鳥」は半絵本三巻三冊、紺表紙、題簽は子持杵に「繪本見立百化鳥上(中下)」初板は宝暦五年正月、江戸日本橋四日市万屋彦八と同室町二丁目泉屋平四郎の合板。巻末に「續見立百化鳥」の近刊予告を持つものと持たぬものとの二種があり、その後明和頃であらうか大坂心斎橋筋柏原屋佐兵衛の求板本もある。内容は図版(一)の如く各半丁を一面として日用の器材を木と鳥に見立てた絵を載せ、うがちのきいた説明の文章を附す。即ち見立の絵と故事附の文とが一体となった戯作である。

序、跋には次の如くにいう

見立百化鳥序
ある夕ぐれの事なるに暑さしのがむと。舟の脚をさし伸し。
三股にかゝるに。かたえの小楼舟に。血氣の撥音。木にと
りとめむ。くとの。はやし唄。其見立の可笑さに。鼻紙
に写しとめぬ。筆の禿うへ。宵闇の星明り。濁字曇字にこ
そ候へかし

画士 漕川小舟

跋

すでに船は隙を鳥。汐さ木に追れ。小屋形の連び木も。拍
子鳥もはや。あかつ木の。早鳥となるに。鐘つ木を数鳥で
見れば。華鳥百に及べり。ア、コレ氣のつ木や。手間鳥や。
されどもす木に。涼鳥けり
面あつく額に汗する日 友人太井紋太

即ち、兩國三股の夕涼みに、とある涼み舟から聞えて来たはやし唄の文句が、百に及ぶ木と鳥の見立故事附だったので、それを写しとって帰りに見立絵本に仕立てたものだという。跋文は既にそれ自体木と鳥尽しの文章である。この木に鳥尽しのはやし唄が具体的に何という歌謡であるのか今指摘出来ない。しかし「松の葉」以来の歌謡書に「――尽し」「――摘へ」の題名で入る類歌は数多い。さしずめ「絃曲粹弁当・二篇」天明三にのる次の「鳥づくし」等にその面影はしのばれよう。

抑鳥はさまん、おか、へのすもふとり、国は因幡のとつとり手とり、眞鳥におとりはせまじまけまじ、きんじよと

なりのよいきりようもの、庄屋のあととり、ばいどりがちなら横とりねとり、中居はとことりあの命とり、そんな雲にかけはしまんこの月、女郎はうきやちりとりもなし、いらぬ物よと禪宗はさととり、ちとまたぼつとりだまされうつとり、さんさ見事へわれらほうかれた、うかれうかれてそふじはよいか、めてたいはく

現に此の唄にあらわれる十五の「とり」の内十三迄が後述する「百化鳥」シリーズの内にちゃんと収まっている。序文に言う所は大略事実とみてよからう。即ち「見立百化鳥」の発想は、江戸三股の夕涼みに聞こえて来た流行唄という如何にも江戸中期の遊樂気分濃い情調の中に醸し出されたのである。

跋文には「数鳥百に及ぶ」といふ。しかし「見立百化鳥」は五十十対の木と鳥の見立を収めるに過ぎぬ。その欠を補う為に、巻末に予告された「續百化鳥」は翌宝暦六年半紙本三卷三冊で同じく万屋・泉屋の合板で刊行され、又同じく大坂の柏原屋に求板された。やはり序文に誦もどきで言う

今日に相當て候。本商人の涼みに出候ひしが。此川の邊にて年の比十二三ばかりなる。しかも鹿の子のおしやべり振袖が。はやし三味線に聞とれ。写しとりたるを。終にさくら木に乗せて。隣の枝へわたし候。さる間そこ爰の御ひる木に。落を鳥たるよろこび。其尾の長々と跡をつがむ事を乞ふ云云

亥の水無月 古面堂書

今度は各半丁に絵と文章を見聞きに入れた体裁がいさ、か違ふのみ、画師も文章の作者も前編と同一作者である事は明らかで

ある。即ち漕川小舟も古面堂も同人異名であらう。しかしこの續篇に収める所は二十三対、未だ表題にも言う「百」に満たない。しかも續篇巻末に予告されたのは「見御伽美なし貝全三冊」とあつて、右は三十六の見立貝尽にて御座候」と口上書を記す。作者は既に木と鳥の見立には興味をつげなくなつたらしいと見えた。実は同じ年の春も一つ、木に鳥見立の絵本が刊行されているのである。書名もまさしく「繪本木に鳥 前編」とあつて半紙本三巻三冊、紺表紙。奥附には「宝曆六丙子春 大阪書林心斎橋筋木挽中之町吉文字屋市兵衛 心斎橋筋安土町同（吉文字屋）源重郎、江戸書林日本橋通三丁目同（吉文字屋）次郎兵衛 新版」とある。内容からみても江戸物である事は確實故、江戸の次郎兵衛が大阪の同族をたのんで合板に出したものであらう。序に言う

（前略）世に百化鳥あり余かれに落たるをひろひよ木もあし木も見とりき、とりあまれりや足らすやと百はかりに画捨てぬしかあれと佗に洩すへきにあらねは文匣に投入たり時は寶曆亥のとし文月の反古なりけらし 木林山人と。即ち該書又「百化鳥」の欠を補う企てであつた。掲載数は二十四対、前二書と合せて大略百に近い。しかし該書の作者木林山人は正續「百化鳥」の作者とは別人のようである。板元の違ひもさる事乍ら、序跋の書きぶりがまるで違ふ。しかも「百化鳥」と「續百化鳥」の間には題材の重複は一つもないが、「續百化鳥」と「木に鳥」の間には二十三、四題の内に「さ鳥」「すみふ鳥」「大ふく鳥」の三題が重複する。即ち別人による趣向の合致と見るべきであらう。無論題を同じうするのみで、

内容は異なる。恐らく宝曆五年に正篇「百化鳥」が刊行された際、續篇の草稿は既に出ていたに違ひなく、それを垣間見た木林山人なる人物が、正続合せても百に足りぬを以て、その足らざるを補はんとしたものではなかつたかと思われる。当時の出版事情から見ても同好者の間に草稿が回覧される事はさして稀な例でもない。その結果、正篇の好評の故もあつて、翌六年には續篇と「木に鳥」との同時出版というようにな事にも立ち至つたのであらう。木林山人が正續「百化鳥」の作者と同好の人物であつたらうと考える事は、ひいては「漕川小舟」「古面堂」の戯名にかくれた正續「百化鳥」の作者の实体を考えるうえに大きな意味を持つようである。

三

「繪本木に鳥」が正續「百化鳥」と異なるのは作者のみではなかつた。百化鳥が何れも見立絵と説明文のみで終始しているのに対し「木に鳥」はさらに題に因んだ発句二句を各半丁づつに記している。即ち表半丁に絵と文を記し、裏半丁にそれに因む発句二句を記すという体裁である。即ち一種の俳書の体裁を示して、作者がその道の人物なる事をのぞかせている。発句に附された名前は昼鼠・櫻櫛・宇翠・壯月・月夕窗・南極斎梅動・随波館古く、呉竜等々二十四人殆んど他書に見えない俳名であるについては、序文の次に附された「断書」なる一文に次の如くにいう

風坊此書をものして且句勸進せんと予よしと諾て采配す集中別号多きもとぬすみもの故缺為に一句を坊主にあたふ

ぬす人のぬの字風や冬籠

盜家一隅あきふの松若

と。即ち凡て該書のみ別号であるらしい。とすれば、何やら似た名前が浮んでくる。昼鼠は老鼠に、樗樛は樗山に、宇翠は拾翠にという具合に江戸座の名録集にでもありそうな名前ではないか。江戸座といえは享保以来一蝶派の絵をふんだんに用いた絵俳書がある。一蝶派の絵又正當の絵様からみれば、大菱格を外した草画・狂画に特徴がある。とすればこの見立絵本「木に鳥」はやはり江戸座の絵俳書の変形と見て差支えないのではなからうか。

ところで「断書」に「風坊」とい、へぬすみもの」というのは跋文を示さねば理解出来ぬ

国に偷家に鼠皆治れる御代のかさりもの駄或日随波館の留守へいきて人目なき待わひに文庫をうかちて一書を袖にひかへたりよし人はしらなみとも昼鼠ともいは、いへとそろそろ梓にひらき待る事也 白昼人偷鼠

しかれば作者木林山人は即ち「随波館古く」として句を寄せた人物でもある。今当時の江戸座俳人にこの別号ある人を書いて浮べる事は出来ないが、前述の如くこれを別号としてその音の相通する所では、絵俳書刊行に精を出した石寿観秀国等をあてる事は出来ないだろうか。しかし先走りはやめて一応江戸座俳人の手すきびになる戯著の一がこの「絵本木に鳥」であると断定出来れば当面は事足りる。

扱「百化鳥」が「画圖百花鳥」なる先蹤作品の題名をもじつたものである事は気づかれた方も多し筈である。「画圖百花鳥」

は享保十四年江戸西村源六刊。探幽原図の百花百鳥を石中子守範なるものが模写して板行したものの大本五巻四冊で花鳥図の版本としても能く代表的地位にあると思われるが、該書はまた画ごとに当時の江戸座俳人の句詠を記しており、更に終巻は歌仙・百韻の六巻をあてるなど、これも絵俳書の一と見なす事も出来得る。序は鳴島錦江と並んで稻津祇空が一文を寄せる。石中子守範は探幽次子探雪の門人なる事が「百花鳥」附言に見えるのみで、その伝の詳細は分らぬが、当時の教訓讀本類にも挿絵を書いている。例えば佚斎樗山の「河伯井蛙文談」享保十年には石田氏、字を中子、名を守範の印が見える。附言によれば附載した詩歌俳諧は過目する毎に書留めたものというが、自ら俳諧にも遊んだものであつた事は、巻中諸所に「石中子 理文」の名で発句を寄せており、祇空の序にもへとときに理子にせかまれてつたなき一句をになひ出し待る云々」とあるので明らかである。恐らく俳係も祇空門であろう。「百花鳥」解説の諸書に「山下守範」と記されるのは、「百花鳥」内題に「野之鬢髮山下石仲子守範」とあるの續み違いであろう。

ともあれこ、でもまた「百化鳥」の成立には江戸座絵俳書の雰囲気が濃厚なる事を指摘するにとめる。

従来「百化鳥」の作者について記されたものは管見に入らない。尾崎翁の複製翻刻の解説にも記されない。しかし天明九年刊の京伝作洒落本「新造図彙」の自序に、そのことが記されているのは、御気づきの方も多かつた事と思う。

(前略) 蝶中の画圖は。龜成が百化鳥の如く。兩國の飛壺（よこ）實に。似り猪牙舟散茶船。頓新造図彙と題して。彼訓彙図

衣抄」天明七等を思い浮べればよからうが、要するに一つの型の中に古今東西のあらゆる事をあてはめて、素強附會を極める事であり、それを「吹寄せ」という。南畝の言によれば龜成はその趣向をひっつけて座敷ばなしが得意だったようだが、それを戯作として表現すれば「百化鳥」の見立故事附となる事言う迄もない。即ち龜成は吹寄咄しの創始者であると共に、見立故事附戯作の最初の成功者でもあったといえる。以来江戸戯作の表現の特色は凡てこゝから誕生して行くこと、中村博士の「戯作論」に詳細である。かゝる方面に殊に秀でていた戯作者に、月成こと朋誠堂喜三あり、万象亭こと森島中良あり、山東京伝があった。京伝に於ける「百化鳥」の投影は前述の如くであり「新造函兼」以外にも天明半ばから文化に至る迄、天明四年の「たなぐい合」同年「小紋裁」、同六年「小紋新法」寛政二年「小紋雅話」同六年「絵兄弟」享和三年「奇妙函兼」文化七年から九年にかけ「腹筋逢夢石」全三篇と、滑稽意匠、見立絵本といえるものの殆んどが彼の手になったのは一方に画家北尾政演としての強みもあるが、「百化鳥」の余沢とも言わば言えよう。「腹筋逢夢石二篇」の序にも

ひどい工面の小冊なれば、其繪たるや。百化鳥のおもむきに似て。とんだ靈宝に髣髴たり

と述べる通りである。

万象亭には同じく天明から寛政にかけ、「見立仮髻尽」天明三年、「たから合の記」同年、「たなぐい合」天明四年、「画本纂怪興」寛政三年、等の見立絵本の作があり、殊に最初の「見立仮髻尽」に記された三十六種の貝の見立の発想は、恐らく前

述の通り「續百化鳥」の巻末に予告されたまゝ、で終つていた「御伽実なし貝」に触発されたものであつたらうと思われる。しかもこの万象亭は、その著「田舎芝居」天明七の序に於いて、戯作の本質を可笑を画くという一点に絞つて、当時流行の瑣末描写の行き過ぎを批判した甚だ著名な一文の作者でもあつた。かゝる戯作の本質の正確な理解者をして傾倒せしめたのが、「百化鳥」に初まる見立絵本の趣向立てであつたのである。

喜三は「娼妃地理記」安永六や「羽勘三疊圖会」寛政三に見立の才能を示すが、何よりもその戯作の中心を黄表紙作家として送り、天明元年、二年の南畝の位附けでは立役之部極上上吉という文字通りの最高位を占めた。という事はその作品はとりも直さず黄表紙の典型を示したものである。黄表紙的表現の特色はといえば、即ち「古今の事を附会して時代違ひのはなし」を構成する所にその中心があり、しかも絵を中心としてその悠々寛々たるユーモアを賞翫すべきものであるが、喜三二の作は春町と共にその意味で一等他に抽んでゐた。竹杖為輕の「夫従以来記」天明四に曰く、へたとえて申さば喜三二は徠、春町四方は春台南郭と。この喜三二が龜成門人なる事は大野酒竹の「平沢月成」しからみ草紙に出て明白である所、その入門は明和三年喜三三三三十二才の秋とされ、師号に因んで雨後庵月成の俳号をなす事になる。その後七年にして戯作界に顔を列ねるが尤それ以前十三、四才から存義に学んでいたため、その線に沿つたのではあろうが、末だ存義在世中に龜成の門に入つたのは、余程龜成の俳風がしたわしかつたものと思はねばならない。その後晩年迄雨後庵月成の号は変えない。同じく存義側

でしかも秋田藩留守居役として極く近々の先輩に当る佐藤晩得の影響は勿論重大であろうが、その戯作者としての活動面に於ける亀成の投影は誠に大きかったものと断定してあやまるまい。かく、江戸戯作界の三人の大立物に影響した兩夜庵の宗匠ではあるが、その一生は殆んどわからない。没年を諸書に宝暦六年六月廿五日とするのは恐らく「江戸名家墓所一覽」の誤りを伝えたものであろう。手近の俳書をくつても、明和丙戌（三）年正月の春興に

帰る事わすれて居るや雪の雁 亀成

の句がある。前引の「俳諧鱗」初篇は明和五年の刊行であるが明和七年の同書二篇には既に亀成の名はない。その間の没である事が推定出来る。「名人忌辰録」は余り信用出来るものではないが、亀成没年を明和六丑年六月廿五日としているのはよろしかろう。牛島弘福寺に葬るといふのは「仮名世説」以来諸書に一致するが、その墓の存否は未だ確かめていない。その没するを悼んで月成に

踏むまじといふ影もなし高燈籠

みね入や怯螺貝起て白雲飛

草市や大路をはしる露の玉

の三句ありといふ。

五

「百化鳥」の作者に関する類推は目下右以上にふくらみます事は出来兼ねる。そこで今少しその前後の模様を述べて、見立絵本の系譜を明らかにしておきたい。

「見立」という表現様式が、文芸に採り入れられたのは、甚だ古い事に属する。近世に限っても仮名草子の極く初期からそれは盛んである。「鴉鷺合戦物語」のような鳥類を人間に見立てた擬人法から「露殿物語」のような美人を花に見立てる方法迄多様な試みがあり、更に俳諧となれば貞門の式目に既に「見立」の語あること周知の事実である。しかしこのようなものは凡て表現の一手法であつて、戯作における「見立」という趣向がそのまま表現の主眼と迄なっている事との径庭は、これ又中村博士の「戯作論」（P 237）に余す所なく説かれてゐる。まして文章表現の枠をふみこえて絵を多用し、滑稽機智を發揮することに努める体の「見立絵本」となると、全く戯作畠独特の産物と言ふべきであらう。その類のまさに陳呉といふべきものが、この「百化鳥」だったのである。もつとも「見立」の語に即けば「百化鳥」刊行と同年の宝暦五年七月、京の銭屋と菱屋及び江戸の鱗形屋の合板で「見立子寄遊」なる半紙本二冊の小冊が刊行されている。内容は紙槎を用いて「富士見西行」「燕」など種々の型を作る絵手本といった所で、享保頃から流行の謎や手品の伝授書等と同様のものであり、機智は見えても滑稽の要素は甚だ薄い。「割印帳」には京ひしや板とある。該書奥附には「軽みだちのうみ 曲見立智繪海」と題する物の予告があり、へ右は見立の替りの趣向を取組近日本出し申候」と口上があつてこのようなもの京に於ける流行を示している。かゝる類の滑稽絵本で「百化鳥」以前に刊行されたものを書目類から拾ひあげれば

- ① 智恵較 環中仙 享保十二年 二冊 京
- ② 絵本からくり時計 享保十三年 三冊 京

- ③ 初製目付字 源兼勝 // 二冊 京
- ④ 謎絵東文字理 雀囀軒 // 十四年 二冊 京
- ⑤ 当世影絵姿鏡 環中仙 // 十五年 二冊 京
- ⑥ 続戲艸 かねかつ 享保十四年 二冊 京
- ⑦ 環訓兼鑑草 環中仙 享保十五年 三冊 京
- ⑧ 御伽ゆめ合 一洞 享保十五年 二冊 京
- ⑨ 絵本珍口記 元文四年 四冊 大阪
- ⑩ 清小納言智恵板 含靈軒寛保二年 一冊 大阪
- ⑪ 御伽三笑子点頭 寛保二年 三冊 大阪
- ⑫ 御伽智恵占 山田神藏
- 等々が目につく。所在不明の物、未見の物もあり、確言はさけるが、殆どが前述「子奇遊」のような伝授書、もしくは解説書といった半ば実用を兼ねたものである事は推察するに難くない。「智恵」「御伽」といった題名も童幼向きのものであるといふ意味と共に極く通俗的な遊戯雑芸の解説・指南といった意味を持つようである。但し「絵本珍口記」は祐信の絵で、しかも題名からして塵劫記のもじりである所から、何か当世風な大人向きの滑稽を感じさせるが未見である。そして享保年中は殆どが京板で、中に三都板があつても、作者からみて恐らく京都書肆が中心である事は間違いないのに対し、元文からは大坂板が抬頭しはじめるのが注目すべきであらう。そして宝暦に入ると「百化鳥」の刊行をきっかけに江戸板見立絵本の時代が始り、内容も大きく進展するのである。「百化鳥」の内容の新味が作者亀成の江戸座俳人としての資質、習練によるものであろう事は前に縷説する所である。又絵本としての構成も特に江戸座の絵俳書の存在

が大きな前提となつている事も前述の如くである。更に補説すれば、例えば延享二年刊行の江戸流行物を集めた絵俳書「俳諧時津風」を見るに（山下敵膝）の題に示された絵と発句をめぐつて「武江年表」の月峯の解と、それに附された喜多村筠庭の補正の解の紛糾を見てわかるように、既に絵俳書そのものが一種の機智と見立の面白さによる趣向を表現の眼目としている事が理解され、こゝから「百化鳥」迄の距離がいかに間近いかを如実に示している。

一方大坂では「攝陽奇観」卷三十、宝暦五年の条に

畫合といふもの初而流行す 其後明和安永の頃盛んに行はれ後世風体かはり行共文化文政の頃に至りても流行す安永四年俳諧畫合おろの鏡といふ小本出版す

とある。「おろの鏡」なるもの未見ゆえ正体がしれないが、見立絵と相通ずる雰囲気のものである事は間違いない。宝暦といへば既に享保迄の万事に上方優位の時代思潮と異り、殆ど東西同時の流行現象が文芸面でも見え始める。例えば宝暦六年江戸では人間の一生を道中に見立てた教訓戯文が大流行し「迷所邪正案内」「善悪両道中独案内」「善悪二道みちしるべ」といった板本や一枚摺が同年に刊行されるが、同じ年大坂でも「人間一生道中図」の刊行をみている。これらからみて上方の絵合の風潮が江戸に働いて見立絵本の統出となつた事も十分考えられよう。例えば翌六年江戸板の「小口合」等明らかに絵合せ流行の江戸波及と断言出来る。寛政六年板の京伝作「絵兄弟」は、恐らく絵合せの傑作と言えようが、これは又見立絵本の傑作でもあつた。上方では同じ頃扇合せも流行して会が催され、

「扇会評林」宝曆五年刊等の刊行も見た。かゝる遊戯・遊芸の雰囲気が彌漻した時代相でもあったのである。しかし京坂では、見立絵本の流行らしきものは余り窺えない。大坂に宝曆六年北尾

雪坑奇画の「絵説竿」あり、京都に宝曆七年刊一籠子述花耕山人画の「錦心珍画譜」が出たのが幾分かその風潮を具体化したものと云えようか。それも前者は滑稽開帳や能画を趣向し、後者は地理人物鳥獸魚貝等、訓蒙図彙まがいの部立てに滑稽な着想の画を集めたもので、例えば「富士の雪」の題には封じ目に「雪」の字を書いた封じ文を画いて、解くという洒落をあらわす等着想の滑稽機智は認められるが、見立絵という面では今一つ江戸物とは微妙に違ったニュアンスを持つ絵本となっているやはり江戸と京坂の体質の違いが、この辺りから歴然としてきたものと言えようか。「百化鳥」が後に上方に求板されている事は前述したが、その求板者柏原屋佐兵衛の藏板目録中に次の如く記される。

画本見立百化鳥 神事遷宮等の造り物の仕様

同續 右同

(明和八年板「狂歌酒百首」附載永昌堂藏板目録)

即ち、該書は大坂で賣り出された時は俄等と同じく祭礼の練物として、踊屋台や山車に画いたり造りつけたりするための滑稽図彙案集といった実用性を持たされていたらしい。この辺りにも、宝曆以来の江戸戯作が良くも悪しくも戯作作品として独立を果した存在となり得たのに対し、上方ものがどこかで祭礼や遊芸といった技芸や実用性を兼ねる雰囲気から脱し切れないまま、次第に文芸としての座を江戸物に譲り渡さざるを得なかつ

た理由が垣間見られるように思う。

かくして「百化鳥」以後の江戸見立絵本は幕末迄優に一ジャンルを形成する程の流行を示すのであるが、全体を通じて、この系統に於ける「百化鳥」の影響は甚だ著しい。即ち見立絵本類の序文にそれは如実である。

○世に百化鳥あり、余かれに落たるをひろひ、よ木もあし木も見とりき、とり、あまれりや足らすやと、百はかりに画捨てぬ。

宝曆六年刊「絵本木に鳥」序
○石を敲て羊となすもの有り今それによる駄イ、ヤしからば先に百化鳥の作ありまた是にもとづくかう、

宝曆十年刊「風流准仙人」序
○漕川小舟の見立百化鳥、耳に覚へ口につたへて意にわすれず

明和七年頃「抛入狂花園」序
○膝中の画図は、龜成が百化鳥の如く、兩國の飛靈寶に似り、猪牙舟散茶船

天明九年刊「新造図彙」序
○其絵たるや、百化鳥のおもむきに似て。とんだ靈宝に髣髴たり。

文化八年刊「腹筋逢夢石二編」序
○いつの比いかなる人のたはぶれに写おけるにや有けん百化鳥となつけしとじぶみ余反古の中にあなるをこたひ花の桜木にちりはめん事をほりす

文政十年刊「狂歌見立百化鳥」序

以上宝曆より文政迄連綿と「百化鳥」の影響が続いている事歴然としている。以下に「百化鳥」以後の見立絵本目録を記してみる

- ①見立百化鳥 半三 宝曆五年刊 漕川小舟 江戸板 木と鳥の見立
- ②見立子寄遊 半二 宝曆五年刊 井蛙子 京板 こより遊び
- 予告 見立智絵海
- ③続百化鳥 半三 宝曆六年刊 古面堂 江戸板 木と鳥の見立
- 予告 御伽実なし貝
- ④絵本木に鳥 半三 宝曆六年刊 木林山人 江戸板 木と鳥の見立
- ⑤小口合 半三 宝曆六年刊 雲洞 江戸板 小口の見立
(稀書複製会本あり)
- ⑥絵説竿(絵本綴摺草)半三宝曆六年成・明和二年刊
大坂板 滑稽開帳
- ⑦風俗神名帳 半三 宝曆七年刊 茂義堂 江戸板 神名の見立
- ⑧錦口珍画譜 半三 宝曆七年刊 一龍子 京板 地理・人物・鳥獸・魚介等訓蒙図彙風見立
- ⑨暗夜訓蒙図彙 大一 宝曆九年刊 芝立 江戸板 吉原風俗の訓蒙図彙見立排書(珍書保存会叢書本あり)
- ⑩風流准仙人 半三 宝曆十年刊 鶴歩道人 江戸板 仙人見立

- ⑪新文字絵尽し 中一 明和三年刊 (不明) 江戸板 文字絵(稀書複製会本あり)
- ⑫抛入狂花園 中一 明和七年頃刊 瀬川某 江戸板 江戸流行物の生花見立(稀書複製会本あり)
予告「續狂花園」
- ⑬(也有翁戯作)写一 宝曆明和頃成 也有 名古屋木、鳥、果、虫、曆等見立。(続学舎叢書所収)
- ⑭一目千本花すまひ 横二 安永三年刊 紅塵陌人 江戸板 遊女の生花見立
- ⑮へ見立花くらべ 小一 安永七年刊 洒落齋 江戸板 花の見立
- ⑯生花故美化 半一 安永八年刊 渾沌子 京板 生花見立(花道文献集成所収)
- ⑰能似画 小一 安永八年刊 不通 江戸板 割箸と盃による見立遊び
- ⑱きん／＼星話 小一 安永九年刊 稟實 江戸板 星の見立(未翻刻明和珍本六種所収)
- ⑲見立仮誓尽 半三 天明三年刊 竹杖為軽 江戸板 貝の見立(稀書複製会本あり)
- ⑳たから合の記 中一 天明三年刊 竹杖為軽等 江戸板 滑稽開帳(稀書複製会本あり)
- ㉑たなぐい合 中一 天明四年刊 万象亭等 江戸板 滑稽意匠(稀書複製会本あり)
- ㉒小紋裁 小一 天明四年刊 京伝 江戸板 滑稽意匠
- ㉓小紋新法 小一 天明六年刊 京伝 江戸板 滑稽意匠

- ②新造図彙 中一 天明九年刊 京伝 江戸板 吉原風俗の訓蒙図彙見立
- ③小紋雅話 小一 寛政二年刊 京伝 江戸板「小紋裁」の増補版(名著全集「滑稽本集」所収)
- ④画本纂怪異 半二 寛政三年刊 森羅万象作 政美画 江戸板 化物見立
- ⑤羽勘三台図会 中一 寛政三年刊 喜三二 江戸板 芝居の三才図会見立
- ⑥絵兄弟 中一 寛政六年刊 京伝 江戸板 絵合せ
- ⑦奇妙図彙 小一 享和三年刊 京伝 江戸板 文字絵(名著全集「滑稽本集」所収)
- ⑧紅毛かつり影絵於都里伎 小一 文化七年刊 一九 江戸板 影絵合せ
- ⑨腹筋逢夢石・初篇 中一 文化七年刊 京伝 江戸板 見振り・物眞似
- ⑩腹筋逢夢石・二篇 中一 文化八年刊 京伝 江戸板 見振り・物眞似
- ⑪腹筋逢夢石・三篇 中一 文化九年刊 京伝 江戸板 見振り・物眞似
- ⑫狂歌百化鳥 半一 文政十年刊 元成 江戸板「百化鳥」に狂歌を添えた物
- ⑬和談三細図会 中一 天保十三年刊 曉鐘成 大坂板 三才図会見立
- ⑭絵姿合 中一 天保十五年刊 種員 江戸板 絵合せ

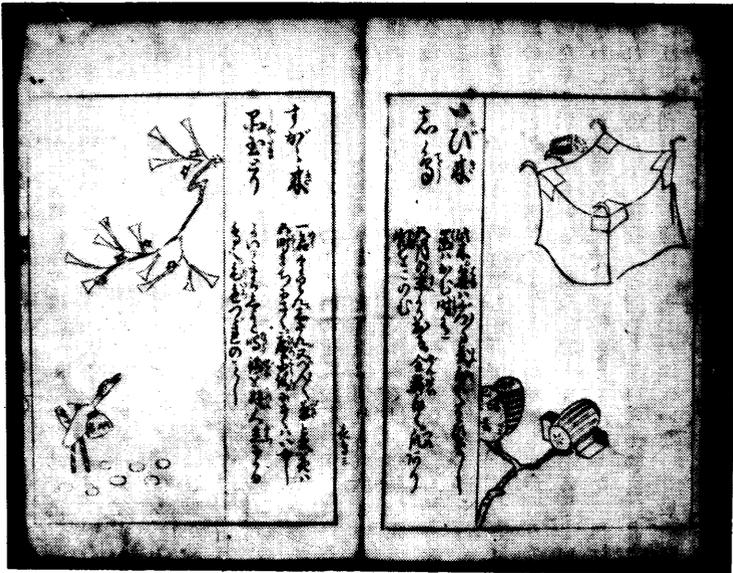
以上、所見本のみを記したが洩れているものも多々あろう。黄表紙等はその殆どがいわば見立絵本とも言えようからこゝには省いた。しかし大略の輪郭はこゝに示すもので摺む事は出来よう。書型は初期の半紙本三冊が次第に小本一冊、中本一冊になつていく所、江戸戯作の大勢と一致する。刊年も宝暦から天保迄殆んど様に出ているのは、内容によって改革政治等の影響をうける事の多かつた読物に比べて、表現の眼目が純粹に滑稽一本に絞られているため、戯作の続く限り存続するという性格を示しているよう。それでも時好の変や作者の得意とする所によつて幾分のかたよりはあろうで、明和から安永にかけての生花見立の続刊はそのまま当時の生花流行を示しているし、天明の滑稽意匠・文化の見振り物眞似は何れも京伝という特異な才能のしからしむる所であつた。作者では、初期の江戸座俳人の余伎に始まり、天明以降は万象亭と京伝が最も精彩を放つたのもこの種の作が、可笑おかしを専らとする戯作の本道を行く作品である事を示している。刊行地も江戸が中心をなした事は、近世後期の文芸としては当然の事乍ら、いかにも江戸好みの作品であつた事を示してもいる。也有に⑬の作品のある事もいかにもふさわしいが結局名古屋では刊行されずに終つた。刊行されるとすれば、恐らく「鶉衣」と同じく江戸人士の目にとまつた場合に江戸で刊行される運命にあつたに違いない。最後に内容の傾向を大別すると、最も正統的なものは、やはり、木、鳥、花・星・貝・神名・仙人・といったようなそれぞれの事物について見立、故事附の極を行うもので、滑稽開帳の図録風のものもこれに準じた試みであろう。次には訓蒙図彙や三才図会、若しく

は生花といった、従来通用の形式になぞらへての見立を行うもので、第三に滑稽意匠は京伝の独占、第四に絵合せや文字絵、或いは見振り物真似等の酒席の余興に用いられる体のものであるが、これは「百化鳥」以前の実用的な伝授書解説書の意味をうまく戯作に消化していったものともいえよう。

何れにせよ、こゝには滑稽の才と機智の働きによって醸し出される可笑味の外には何も無い。即ち江戸戯作の何たるかを知らんとする為には、最も手っ取り早い標本が是等の作品であり近世文芸の原典の一つであるという初めの言葉を改めて痛感するばかりである。

註

- (1) 「百化鳥」 正統二篇は昭和四十五年七月、近世風俗研究会から複製翻印が刊行された。故尾崎久弥翁の御骨折である。その他は中村博士の註2の論に引用されるぐらいであろうか。
- (2) 中村幸彦「戯作論」
- (3) 後述する如く柏原屋（永昌堂）の明和八年板「狂歌酒百首」の巻末藏板目録に此の書の記載がある。
- (4) 「俗耳鼓吹」にも同様の文あり。
- (5) 註2のP22。
- (6) 拙稿「前期戯作の方法」参照（「国語と国文学」昭46・10月）
- (7) 井上隆明氏「喜三の年譜資料」参照（「秋田文学」昭40・5月）
- (8) 大野酒竹「平沢月成」（「しがらみ草紙」明治27・5月号所収）。同書には月成の句が多く引用されるが、その原典についての記載がなく、何によられたか不明。



(9) 「増訂武江年表」 P 106

図 I 「百化鳥」初篇

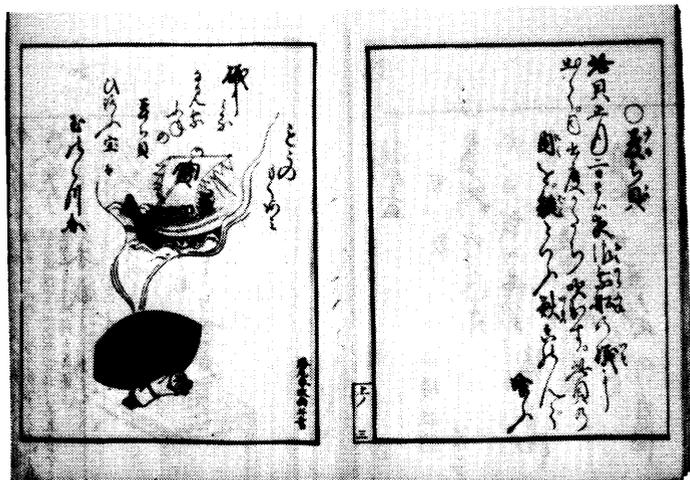


図4 「見立仮譬尽」

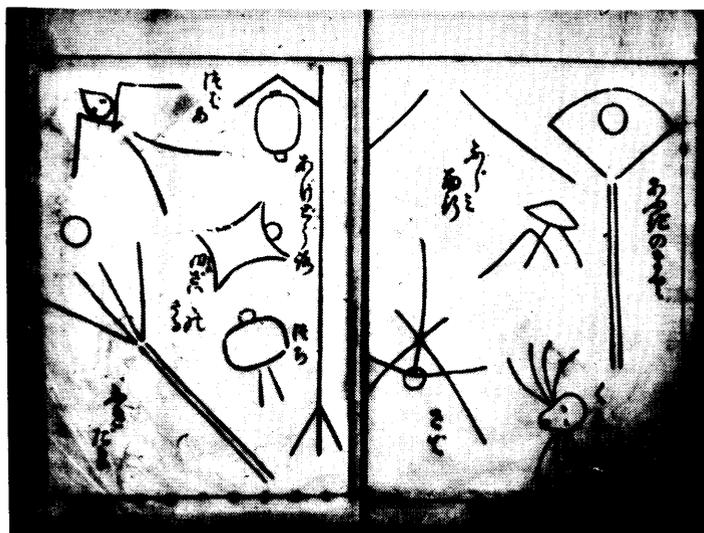


図5 「見立子寄遊」

おわりに

故尾崎久弥翁が「百化鳥」の複製を作られる際、私に見立絵本類の書誌を集めて呉れと命じられた。その時作ったメモが此の稿の骨子である。尾崎翁は複製の解説を書かれるに当り、私の提出したメモには全く触れられなかった。自分で発表せよという御配慮だなど、その時私は思った。そして翁は逝かれた。私は翁の最晩年しか知らない。翁の気性の激しさは語り草である。しかし私は御尋ねする毎に「有難う、有難う」と



図6 「俳諧時津風」

繰り返し返される笑顔しか思いうかばない。横山重翁は「軟派を研究する人は大変真面目な人が多い」と言われた。これは軟派をやらない人の不真面目さをあげつらった時に窺ったのか。尾崎翁の話が出た時に窺ったのか忘れたが、その両方だったろう。尾崎翁は頗る真面目に一生を歩まれた。晩年の繊な間でもその風貌に接し得た事を有難く思っている。

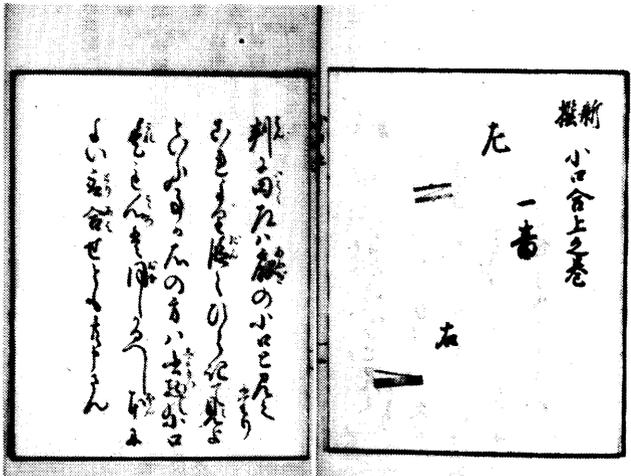


図7 「小口合」